

めあてを立てよう!

前々回の東雲では、「指導と評価の一体化」の大切さについて紹介しました。では、具体的に指導と評価の一体化とはどんなものなのか、「めあて」の視点で今回紹介します。「めあて」を授業で立てている方は、どんな視点で立てていますか？子供にとっての本時の目標なので、とりあえず「～～しよう!」とか「～～について考えよう」にしておけばいいか。になっていませんか？実は、そこに評価の視点が必要になってくるのです。授業を進めて行くにあたって着目すべき評価と言えば現在は4観点ですね（今年までですが・・・）。この4観点とは「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」となります。この観点を受けて、各教科の特性に応じた観点が4つ（国語は5つ）設定されています。この観点に沿って、「めあて」は立てる必要があるのです。

ちなみに、1時間の授業でこの4観点の内、いくつの観点で授業をする必要があるかご存じでしょうか？研究授業を参観に行くとたまに4観点全てを目標に取り入れている授業を見ることがあります。そんな、無謀な設定は望ましくありません。普通は1つ。せいぜい多くて2つです。そう考えると観点と「めあて」の繋がりもわかってもらえるでしょうか。「めあて」はその1時間の授業で目指す観点到した表現でなければならぬと言うことです。ポイントは、めあての文尾の表現です。そこを見れば、概ね何の観点を指しているのか見ることができます。例えば・・・

【関心・意欲・態度】

「～～について気付くことは何だろう」「～～を挑戦しよう」

「～～を推理してみよう」

【思考・判断・表現】

「～～について考えよう」「～～の解決方法を考えよう」「～～を表現しよう」

【技能】

「～～について調べよう」「～～をつくろう」「～～グラフを用いて整理しよう」

【知識・理解】

「～～について知ろう」「～～を見てみよう」

（各教科の評価規準に則した表現になるので、一概にこれだけではありません。）

このように表現すれば、どんな観点を目標にして授業をするのか明確にできますよね。だからといって、次のような表現は望ましくありません。

「～～について理解する。」

これだと指導案の目標のようで、子供にとってはちっとも魅力を感じられません。一番望ましい「めあて」の表現は、子供にとってワクワクする表現がいちばんです。

「探偵〇〇の△△の秘密を探れ!」（思考・判断・表現）

といった表現だと、今日は何をするんだろうというわくわく感がありますよね。できればそういう「めあて」を立てたいものです。

・・・ to be continued ・・・